


屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



2024年ヤクザル調査を行いました！	02
調査員からのクーコール (9) 三井崇史さん	04
調査メシ (9) 広島風お好み焼き	06
やくざる七つ道具 (9) Garmin InReach MINI2	08
屋久島の森の住人たち (9) ハシブトガラス	10
解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし (9)	12
やくざるなよんこま (9)	15
24時間戦えますか (5) お昼ごはん	16
犬山より	18

2024年ヤクザル調査を行いました！

今年は、調査が始まる前から憂鬱なことがありました。大川林道の終点の手前4kmのところまで陥没しており、そこから車では行けないことが分かっていたからです。2019年から2021年まで、3年連続で林道の陥没が発生していました。これだけ頻発すると、さすがに無策ではいけない、と思った私は、研究費で折り畳み式リアカーを購入することにしました。経験上、キャンプ生活をするには、各自、個人の荷物にプラスして5kgから10kgの共同装備を担がなければいけません。このリアカーの耐荷重は250kgとのこと。うまくいけば、共同装備を全部載せられるかも、と思ったのです。ところが、実際に組み立ててみると、これが意外に小さい。結局、陥没よりも手前でテン場を作ることにし、そこから毎日、林道終点まで4kmの道のりを歩いて調査に通うことにしました。

毎日、片道1時間弱、てくてく歩いて通いました。幸い、天気には恵まれ、調査は順調に進みました。テン場から最も遠い、調査域の東の端から調査を始め、一番東の7定点を各5日間、その少し西の7定点を各5日間、8月7日から17日まで、一日も休むことなく調査することができました。そのころ、中核メンバー2名が体調不良で調査を離脱。定点の場所がよくわからない真ん中の場所を飛ばし、調査域の西の端の、テン場周辺を調査することにしました。それまで、全員が調査を終えてテン場にそろおうのは6時半過ぎ、ミーティングが終わるのは8時半ごろだったのが、5時には全員テン場に戻ってきて、まだ明るい7時に、ミーティングも終わってしまいました。「いやー、ほんと、楽でいいね！」と、長い夜を楽しんだのでした。

ところが、長い夜を楽しんだのはたった一晩だけでした。8月19日の未明、今年の調査で初めての大雨が降りました。私は、シュラフが何か冷たくて目が覚めました。ブルーシートが敷き詰めてあるテントの床を触ってみると、「たぶたぶ」しています。雨が降ると水路になってしまう場所に建てられていたわたしのテントの下を、水が流れていたのです！このとき、午前3時47分。外に出てみると、集会場では、屋根代わりにブルーシートがめくれ上がり、その下に入っていたテントは、ポールが折れて、中の



てくてく歩いて調査地からテン場まで帰る途中。帰り道は、皆さんの顔も明るいです。

リアカーの愛称はジュリー1号。リアカーを最初に引いた調査員の名前にちなんで付けました。最初のテン場生活の間、陥没地点の50メートルほど先にある水場から車まで、水を満載したタンクを運ぶのに使っていました。

人は明かりをつけて逃げようとしていました。これはもう、一度撤収して全部乾かさないとだめだと判断し、みなさんを起こして、各自荷物をまとめ、6時ごろ下山しました。

この日と翌日は休みにして、濡れたいろいろなものを乾かし、テン場は完全に撤収して、その後は好和荘から毎日車で日帰り調査を行いました。今年のヤクザル調査の一番濃い部分はもうおしまい、このままテン場に戻ることなく、淡々と調査終了を迎えるものとばかり思っていたのですが、そうはいきませんでした。最強クラスで日本本土に直接上陸と言われていた台風10号が、8月26日、急に進路を変え、まっすぐ屋久島に向かいました。28日から29日にかけて屋久島に最接近し、大雨と暴風に襲われました。台風通過後、西部林道が不通になったり、白谷雲水峡で橋が流出したというニュースが聞こえてきたり、屋久島の人のSNSを見ると、20数年住んでいて最大の被害、と書いている人がいたり。各地の被害が大きすぎて、森林管理署も大川林道の巡視にまで手が回らない様子でした。歩いてなら入ってかまわない、という理解を取り付け、9月2日に、わたしを含め3人で、終点の手前3km付近まで歩いて下見に行きました。案の定、20か所弱の倒木と土砂崩れがあり、車で行けるのは入り口から2kmくらいまででした。ともかく、歩いてなら調査地に行けることを確かめたので、翌日、テン場設営のために入山しました。各自の荷物は自分で担ぎ、共同装備を、これまでほとんど使われなかったリアカーに載せました。リアカーは、舗装道路なら楽なのですが、がたがたの上り道を引き上げるのには、相当な瞬発力が必要です。この方式を思いついた人間（わたし！）に、怨嗟の声を挙げながら、屈強な男子が交代でリアカーを引き、9kmの道のりを8時間かけて、ようやくテン場にたどり着きました。その後、5泊して4日間の調査を行い、無事、30すべての定点の調査を終えることができたのでした。

林道が不通で途中から歩いて上ることはこれまでも何度かやりましたが、そのほとんどが終点まであと4km地点から、といったもので、今回のように入り口近くから不通というのは、初めてのことでした。大川林道終点に調査基地を定めて、今年で27年。27年に1回くらいは、こういうこともあるでしょうが、しかしもうあと27年くらいは、こういう事態は、勘弁してもらいたいものです。

(半谷吾郎、1993 - 2024年参加)



たいへんな思いをして、荷物を載せたリアカーを引っ張り上げました。

調査員からの

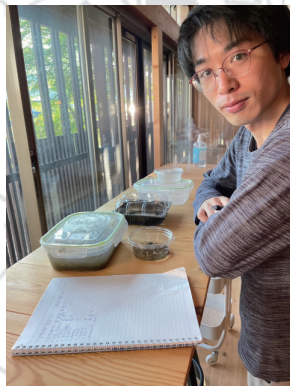
9



クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

三井崇史 2012、2014 年参加

私は京都大学農学部在籍中に、2回ヤクザル調査に参加しました。人生初の本格的なフィールドワークで、息が詰まるような激しい雨、立っただけで体力を奪われる急斜面、ヒサカキやエゴノキの茂みが視界を塞ぐ林道、絶えず襲撃してくるヤマビルなど、決して美しいだけではない自然に圧倒されました。屋久島の原生林に立ち入るという貴重な体験をしながらも、正直なところ美しいと感じる余裕もあまりないほど体力と経験の乏しさに打ちのめされました。



田んぼの生き物観察会での様子

それでも、霧が立ち込める中で地衣類やコケがしっとりとした幻想的な風景、樹齢数百年にも達するスギの神々しさ、鳥と獣の音がときおり響く森の静けさ、人慣れしていないサルの群れに取り囲まれたときの興奮と緊張感は、今でも鮮明に記憶に残っています。景色だけでなく研究手法についても学ぶことが多く、サルの群れを追跡することがこれほど奥深いものなのかと驚きました。調査方法の標準化や定量化、適切な解析手法の選択、先行研究を丁寧に読み解くことなど、技術者・研究者として大切な姿勢を知る経験だったと振り返って思います。これらの姿勢は今の仕事の進め方にも影響を与えており、自分の資産になっています。

大学院修了後は2018年に岐阜県飛騨市の医薬品原料メーカーに就職し、研究開発部で植物を原料とした機能性成分の開発に携わっています。薬学や化学工学の知識が乏しいため勉強の日々ですが、ヤクザル調査や農学の研究で学んだ研究の基本的な姿勢、特に定量的に評価しながら仮説検証を繰り返す根気強さは仕事に役立っています。最近は生成AIを活用して実験条件を最適化したり、展示会での製品説明をロールプレイングしたりと、新しい技術の採用にも挑戦しています。

本業の傍ら、経営も分かるようになりたいと思い中小企業診断士という経営コンサルの資格を取得しました。経営視点で自分の研究を冷静に眺められるようになっただけでなく、社外の仲間ができて多様な考え方に触れる機会も増えました。さらに農業経営支援や書籍作成などの副業も舞い込むようになり、会社員としての仕事以外の経験(と収入)も得られています。屋久島いきもの調査隊の監事にご指名いただけたのも、中小企業診断士としての経営的な視点を期待されてのことなので、ご期待に添えるよう精進します。



飛騨の池が原湿原

現在私が住んでいるのは飛騨市の中でも中山間部にある河合という集落で、野生生物と人間の暮らしがせめぎ合う環境にスリルと面白さを感じています。自然が近い場所で農作業や生き物観察ができる暮らしがしたいと思っていたので、飛騨への移住は自分に合っていたと思います。仕事の傍ら畑で野菜を育てて出荷したり、ビオトープに現れる両生類や水生昆虫を愛でたり、湿地保全ボランティアに参加したり、生き物観察会を主催したりと、自然相手に時に戦い時に楽しみ尽くす日々です。



自宅の庭にキツネが来る

ヤクザル調査のような生物系の研究で身につく知識や経験は、仕事に直接関係ないように見えても意外と汎用性が高く役に立ちます。ヤクザル調査隊に関わった方々が、ご自身の得意分野を活かして様々な道を切り拓いてゆかれることを願っております。



畑で玉ねぎを収穫

木曾川を隔てて岐阜県と隣り合っている愛知県犬山市に住むわたし(半谷)にとって、三井さんが住んでいる飛騨古川は、岐阜の奥の奥の秘境です。そういう場所に、こんな楽しそうな会社があることにびっくりしました。いつか行ってみたいものです。

調査メモ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘をレシピとともに語ります。

榊原未桜 2023、2024年参加

広島風お好み焼き

重たい臉をゆっくりと持ち上げる。好和荘のなかは、うっすらと明るい。他のヒトはまだあまり起きていませんが、半谷先生は仕事をしているようです。

台風10号、サンサンが屋久島に直撃することになり、今日からしばらく調査はお休みになりました。ありあまった時間を、どのようにして過ごしましょうか。雨風が弱い間に観光、インド映画鑑賞、すごろくに絵しりとり。色々な選択肢がありますが、それでも余るほど時間があるのです。なんて贅沢。

ヤクザル調査の仲間たちとなら、どんな時間の使い方をしようと楽しいのは分かりきったことですが、そんななか、私がとっても楽しみにしているのはみんなとの食事です。みんなでわいわいと食事の準備をし、美味しいご飯を食べ、食後に片づけをした後、なんとなく机周りに残っているみんなとおしゃべりをし、お菓子を食ベジュースを飲み、お酒を飲み、寝る前のひとときを過ごす。そんな時間が、私は大好きなのです。

プルルルル。午後、観光から帰ってきてゴロゴロしていると、買い物に



でかけていたヒトたちから、半谷先生のもとに電話が届きました。台風前の買い占めで島中からなくなったと思われていたキャベツが見つかったのです。そして、この一報により、今日の晩御飯は、広島のスoulフードであるお好み焼きに決定しました。そしてなんと、お好み焼きパーティーの最中に三岳を嗜む許可も頂きました。幸せってこういうことを言うのでしょうか。

さて、楽しいご飯の準備の始まりです。キャベツは千切りにし、お好み焼き粉は水で溶きます。私もみんなと一緒に準備をした、と言いたいところでしたが、私は先にシャワーをお借りしておりました。さあ、下準備が終わったら次はいよいよお好み焼きを焼く過程に入ります。先程水に溶いたお好み焼き粉を薄く広げ、キャベツや天かす、豚肉をのせます。少量の生地を上からかけひっくり返し、ホットプレートのあいている場所にうどんを出して温めておきます。うどんにソースをかけ炒めたら、蒸らしておいたお好み焼きの前身をのせ、空いたスペースに卵を広げます。これを合体させたら、お好み焼きの完成です。ホットプレートのスペースの都合上、一人前ずつしか用意できなかったため、みんなで代わりばんこに作っていきます。最初はちびちびと三岳を飲んでいて私も、ついに四代目大将を任されました。先代たちに教えてもらい、わいわい言いながらお好み焼きを焼いていきます。ひっくり返す瞬間には、みんなが息をのみ、スマホを構えて見守ります。うまくひっくり返すことが出来、おとおと小さな歓声があがります。出来上がったお好み焼きは、美味しい美味しいと仲間が食べてくれます。

お酒を飲み、みんなに褒めてもらって上機嫌なまま、時間がゆっくりと過ぎていきます。やっぱり私は、こんな時間が大好きなのです。



やくざる七、道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、 yakuzaru 調査隊は様々な道具を駆使します。30 数年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

Garmin InReach MINI2

この連載では、ローテクの道具をいかに使いこなすか（こなしていたか）という話を主にしている気がしますが、必要なら、そしてお金があれば、ハイテクの道具だって使います。今回は、今年、2024 年の調査で初めて導入した機器を紹介します。



Garmin InReach MINI2 は、通信機能を持った GPS です。電源が入っていると、位置の情報を 10 分に 1 回衛星通信でサーバに送るので、その InReach(を持った人) がどこにいるか、知ることができます。位置情報の通信だけではなく、短文のメッセージの送受信もできます。わたしの所属部署では 2 台を所有していて、今年の 2 月から 3 月、携帯電話もメールも通じないガボンの奥地での調査に持って行って、とても重宝しました。

今年の yakuzaru 調査では、屋久島第二峰である永田岳山頂付近での調査を予定していました。携帯電話が通じない、大川林道のテマ場と山頂での直接の連絡手段として、2 台の InReach を用意しました。結局、山頂調査は不調に終わり、InReach もほとんど使われることなく終わるかと思っていたところ、台風 10 号の来襲で、もう一度テマ場生活をする事になりました。そこで、InReach の再登場です。

車がない状態でテマ場生活を送るにあたって、大きな懸念は、携帯電話の電波が入らない、ということでした。大川林道で電波が入るところは

限られており、テマ場から電波が通じる一番近いところまで、車ならすぐでも、歩くと片道 1 時間弱かかります。天気をこまめにチェックできないと、調査の予定が立ちません。最悪の場合、大雨の予報に気づかず、増水した瀬切川の向こうに調査員が取り残される、ということになります。そこで、京都にいる 2 人の調査員が、気象庁が天気予報を更新する午前 5 時、午前 11 時、午後 5 時に、天気予報をわたしの持っている InReach にメッセージで送ってもらうように手配したのです。

この 2 回目のテマ場生活では、5 泊して 4 日間の調査を行いました。入山日と調査第 1 日はよい天気だったものの、調査第 2 日の 9 月 5 日午後、雨が降りました。ちょうど調査終了時刻の午後 4 時ごろにかなり強くなり、みなさんかなり濡れて帰ってきました。「おかしいな、定時連絡の午前 5 時と 11 時にチェックしたメッセージには、そんなこと書いてなかったのにな」と思い、午後 5 時の定時連絡を待ちました。メッセージは来たものの、送った日付が、前日の 9 月 4 日になっています。そしてそのメッセージには、「明日の午後雨が降るみたいです、*** というサイトでレーダーの予報を見てみると…」と書いてあります。?? どういうこと??

翌 9 月 6 日、朝 5 時に起床してから、それまでは 30 分ほどで電源を切っていた InReach の電源を、つけっぱなしにすることにしました。4 時間ほどかけて、「今日の午後の雨予報についてですが、***」「ちょうど今雨が降っているところだと思いますが***」といったメッセージ、合計 30 通近くが順番に送られてきました。結局、わかったことは、ひとつのメッセージの受信に、場合によっては 20 分くらいかかるので、30 分程度で InReach の電源を切ってしまうと、メッセージが渋滞を起こして、ずいぶん時間が経ってから送られてくる、ということでした。InReach では短文しか送れないので、たくさんのことを伝えようとすると、メッセージの数が膨大になってしまいます。定時連絡を頼んだ二人は、9 月 4 日に、翌日大雨が降りそうだ気付いて、詳細な情報を伝えようと、たくさんメッセージを送ってくれたのですが、まさにそのために、大雨が来るという予報に、テマ場では気づけなかったのです！

風の噂では、2024 年中に、au が衛星通信であるスターリンクを使って、日本の中で、「空が見えるところならどこでも」電波がつながるようにしてくれるのだそうです。来年はもう、携帯電話の電波を求めて苦労することも、なくなるのでしょうか!?

時間差で届いた 30 通の中には、「明日、9 月 6 日の午前中に大雨の予報」というものもあり、9 月 6 日の午前中になってからそれを受け取った私は青くなったのですが、結局、当日には弱い雨という予報になっていた、というオチでした。

屋久島の森の住人たち9

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ハシブトガラス（嘴太鴉）*Corvus macrorhynchos*
東南アジアから中国、朝鮮半島、日本、ロシア沿海州に分布する。
都市部でもごく普通に見られる。

街なかでも田舎でも「カア」と鳴いている真っ黒なアイツ、それがハシブトガラスです。熱帯アジアから極東にいくつかの亜種が分布しますが、北海道、本州、四国、九州に分布するのは亜種 *C. m. japonensis* です。屋久島にいるのもこれです。

街なかの鳥と思われがちなハシブトガラスですが、本来の生息環境は森林です。日本の山林にもちゃんと分布しています。

屋久島の山中でハシブトガラスを初めて見たのは1995年の元日。黒味岳の上空を旋回する姿でした。次は1998年夏、瀬切川近くで、2羽のハシブトガラスがすっ飛んできてカアカア鳴いた時です。

2008年頃から数年間、屋久島でハシブトガラスの調査を行いました。海岸部のみならず、中高度域でも山頂部でもハシブトガラスを発見できました。大川林道終点付近にもしばしば姿を見せます。キャンプしていれば向こうからチェックに来るはず。紀元杉の上を旋回するペアも見ましたし、宮之浦岳山頂直下に来ているハシブトガラスも見ました。ヤクザル調査隊でもお馴染みの分水尾根に定点を置いて座っていたら、向こうから様子を見に来たこともあります。

屋久島での分布調査の結果、いくつか面白いことがわかりました。まず、海岸部を調査してみると、西部林道区間と栗生 - 尾之間区間では密度が全然違います。人の住んでいる栗生 - 尾之間の方が、密度が2倍ほどあるのです（もちろん東京などに比べれば低密度ですが）。人が住んでいる場

所は、それだけで餌資源が増えるのだと考えています。

次に垂直分布。本州での調査から、山のハシブトガラスはスギ・ヒノキ・サワラ植林に多く、広葉樹林に少ないことがわかっていました。ただ、この広葉樹は落葉広葉樹主体です。一方、植林は常緑針葉樹。カラスが植林を好きなのは常緑だから？ それとも針葉だから？

そこで、落葉広葉樹が少ない屋久島の植生を利用し、常緑広葉樹から常緑針葉樹に切り替わる場合で調べたわけです。

その結果、海岸部／中高度域／山頂域でカラスの密度に有意な違いはありませんでした。これは「同じである」を意味しませんが、「照葉樹林帯が好き」とか「スギ林帯が好き」という違いが見られなかったとは言えます。ということで、ハシブトガラスは針葉／広葉にこだわらず、常緑が好きなのだろう、という結論が得られました。理由はおそらく、巣を隠しやすいからです。

ちなみに山の中でカラスを探す時はブレイバック法を用います。カラスの鳴き声をスピーカーで流し、それに反応させるわけです。機材がなければ鳴き真似でも可能です。屋久島でのカラス調査の締めとして、縄文杉でカアカア鳴き、すっ飛んで来るハシブトガラスを見たいなあ、と思ったりしています。登山者がいるとちょっと気恥ずかしいですが。

（松原始、1992-2000年参加）



2012年、分水尾根途中で定点調査中の筆者



2011年、西部林道にて、海から突き出した岩山（エイギュイユ・クルーズ）から飛び立つハシブトガラス



宮之浦岳のハシブトガラス（写真提供：半谷吾郎）

松原さんは、「カラスの教科書」で一躍有名になり、その後何冊もの本を書かれましたが、わたし（半谷）は、「カラスと京都」が一番おすすめです。わたしが屋久島でサルを追いかけていた間、松原さんも同じように、京都でカラスを追いかけていたんだなあ、と感慨を覚えました。

解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし 9

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

20年間の屋久島の森とサルの数の変動を解明する

半谷吾郎 1993-2022年参加

Hanya G, Yoshihiro S, Yamamoto H, Ueda Y, Kakuta F, Hiraki M, Otani Y, Kurihara Y, Kondo Y, Hayaishi S, Honda T, Takakuwa T, Koide T, Sugaya S, Yokota T, Jin S, Shiroishi I, Fujino M, Tachikawa Y (2023) Two-decade changes in habitat and abundance of Japanese macaques in primary and logged forests in Yakushima: Interim report. *Forest Ecology and Management* 545: 121306.

今回ご紹介するのは、ヤクザル調査隊の20年間のデータをまとめた、渾身の論文です。ヤクザル調査隊の歴史を紐解くと、最初の9年間は、さまざまな場所のニホンザルの分布を調べる調査を行っていました。第10回である1998年から、現在と同じく大川林道終点付近、瀬切川の上流域で継続調査を行っています。1998年と1999年は方法の模索の時期で、現在と同じ方法での調査が始まったのは、2000年のことです。その最初の4年、2000年から2003年までの結果は、2005年に論文として発表しています。原生林、伐採後そのまま放置した天然更新地、伐採後スギを植えた植林地の3つで、サルの食物利用可能性と、サルの数を比較する内容です。当時、伐採後放置された天然更新地では、サルが食べる低木の液果の生産量が、原生林よりも高く、そのような場所にサルがたくさんいることがわかりました。

原生林はゆっくりとしか変化していきませんが、伐採地はどんどん更新していきます。それに応じて、サルの数はどのように変化していくのだから

うか。これが、現在のヤクザル調査隊が取り組んでいる、最も大きな課題です。この論文で、その問いに、とりあえず20年間で区切ったときの答えを出しました。

サルにとって森にどれだけの食べ物があるのかを知るために、2002年に、伐採地に5メートル四方の調査区を28個設置し、どんな種の、どのような大きさの木が生えているか調べる、毎木調査を行いました。その調査区では、その年以降、サルが食べる液果の数を数える調査を、ヤクザル調査中に毎年行っています。2019年のヤクザル調査のときに、この調査区の毎木調査をやり直しました。植林地は、2002年も2019年も、当たり前のことですがスギばかりで大きな違いはありません。一方、天然更新地では、植えたわけでもないのに、勝手に生えてきたスギに覆いつくされ、液果を付けるヒサカキやハイノキがなくなってしまった調査区がありました。まだ液果が残っている調査区では、相変わらずたくさんの果実が実っていました。

ただ、これだけでは、サルが動き回る広大な森林の中の、5メートル四方かける数個の、ごくわずかな範囲のことしかわかりません。そこで、林野庁が5年に1回撮影している空中写真を購入して、2004年から2019年までの4回の画像を比較することにしました。スギがまとまって生えているところは、空中写真から判別できるので、2020年と2022年の調査のまとめの際、何人かの人に、スギがまとまって生えているところをパソコン上でかちかち囲んでもらう作業をしてもらいました。そうして、定点の周りのスギのパッチの面積の変化のグラフを書いてみると、2009年から2014年の間に、天然更新地では、スギのパッチが広がったことがわかりました。このときに、サルにとっての生息環境が悪化していたのです。

一方、ヤクザル調査隊の主たるデータである、定点調査の結果をまとめてみると、サルの密度は、原生林と植林地では20年間で差がなかったものの、天然更新地だけ、減少していました。統計に詳しい調査員に、特別な統計モデルでいつこの現象が起こったのかを解析してもらったところ、集団密度は2004年から2008年、個体数密度はもっと早くに減少していることがわかりました。

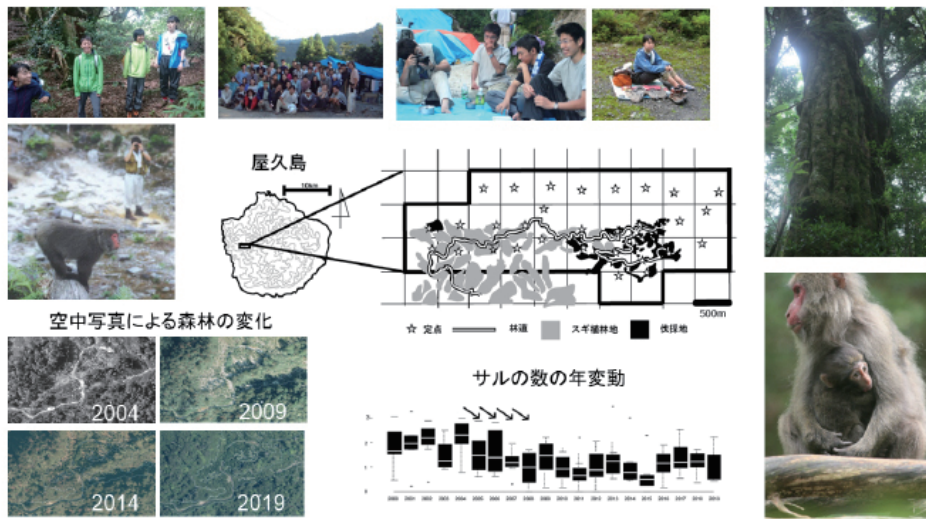
サルにとっての生息環境が悪化したところでサルが減っている。これは分かりやすいストーリーのように見えますが、実際には、サルの減少が先で、

2019年までの20年で論文にまとめた理由は、翌2020年はコロナのために定点調査を断念したこと、半谷が(京大に定年まで勤めたとして)退職する予定の2040年までの、ちょうど中間に当たることが理由です。次は40年でまとめます！

生息環境の悪化が後なのです。これは一体どういうことか？ 2003年、天然更新地にいるPE群で、おそらくはたまたま多くのメスが同時に死亡したことで、集団サイズが急に小さくなる、ということがありました。そのせいで天然更新地で密度が低下したあと、生息環境が悪化して、そのまま回復せずに、密度が低いまま固定されたのだろう、と考えられました。

サルを数10年数えた、という研究は、少数ながらほかにもあります。しかしそのほとんどは、10年に1回とかの頻度で個体数調査を繰り返した、というもので、われわれのように、毎年欠かさず調査をしているような研究は、ほとんどありません。「生息環境の悪化に先立ってサルの数が減少した」という興味深い現象は、われわれが毎年継続して調査を続けてきたからこそ分かった事実です。

934人のマンパワーで20年間のサルの数と森林の変動を解明！



調査隊OGに勧められて、珍しくプレスリリースしました。そこで、著者コメントとして、こんなことを書きました。「本研究に用いた20回の調査に参加した人はのべ934人、1989年の第1回の調査以来の参加者は、1600人を超えます。「ヤクザル調査隊」は、野生動物の長期にわたる個体数変動についての貴重な資料を蓄積するとともに、多くの若い人たちの学びの場でもあるという、稀有な存在です。わたし自身も、多くの仲間たちとともにこの調査を運営することで、研究者として育ててもらいました。ともに屋久島の山の中で苦楽を共にし、今はそれぞれの人生を生きている、年齢も住む場所も職業もばらばらな調査隊OBOGのみなさんとともに、成果を世に出せたことを喜びたいと思います。論文は出しましたが、「ヤクザル調査隊」は終わりません。これからも調査を続ける決意を込めて、論文のタイトルに、「中間報告」とつけました。」

ヤクザルなよんま

メ-リスへのようこそ

いざメ-リスへ加入
Who I am
How to Survive
Welcome!
ヤクザルへ参加

あざり簡潔に
〇〇大1年...
サークル...
Mo ZIME
初めての自己紹介
促されて書く

個性強すぎて不安
きょう
YAKU ZARU
受けとる経験者
からの自己紹介

すっかり立派な
メ-リスの一員に
Im HOME!
YAKU ZARU
けれど帰還メール
を書くころには



バブル期のCMソング「24時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。



お昼ごはん

1日中自由で暇な定点でのお楽しみ…それはお昼の時間です。朝の出発前、めいめい自分のタッパーに入れたほっかほかのあつあつごはん（好和荘から日帰り往復するときは朝にご飯が炊きあがります。文明の利器に感謝です。）と、お供の缶詰や魚肉ソーセージ。ふりかけを持っていくこともあります。ささやかですが、調査員の定点時間を彩ってくれる大切な相棒です。定点について、1時間ほどで身の回りを今日1日快適に過ごせるようしつらえ終わり、さあ何しようというときから、頭の片隅に持ってきたお弁当のことがちらつきはじめます。時間はまだ8時。いやいや、さすがにいくら何でも早すぎます。植物を観察したり、編み込みの練習をしたり、ぼーっとしてみたり。そうしているうちに頭の中で、「ねえ、ごはんいつ食べる？」「いや～さすがにまだ早いでしょ」「でも…お腹すいてこない？別にいつ食べても大丈夫だよ」「え～でも後でお腹すいちゃうよ？もう少し後にしようよ」なんていう茶番が繰り返されます。それでもいったん引き下がって葉書の下書きをしたり、日記を書いてみたり。そのうちにまた心の中で押し問答が始まります。そうこうしているうちに、最終的に悪魔のささやきに負けて12時より早くお昼を食べてしまう、これが私のお決まりパターンです。

昼ご飯のお供として、調査隊で用意しているのは、本文中に書かれている通りですが、朝食用のインスタント味噌汁を昼に残しておいて、自分で調査中に湯を沸かして食べる人や、調査期間の最後には、余った夕食用のレトルトを食べる人もいます。

とある日の定点調査。いつものように定点でのんびり過ごしていると、シカ・植生調査組だったインドお兄さん＆柴田さんが現れました。基本的に定点では1日一人で過ごしてお昼もちろん一人ですが、たまに他の調査をしているヒトとご一緒できることもあります。この時もちょうどお昼くらいの時間だったのですが、例のごとく早めにお昼をすませてしまっていた私は3人でランチタイムを逃してしまいました。残念無念。

このお昼いつ食べるか問題、他の調査員はどうしているのだろう、鋼の意志を持つヒトはいるのだろうか？探してみようということで、とある調査員Sさんに聞いてみました。

Sさんの場合…お昼を早く食べてしまうと楽しみがなくなっちゃうし夜お腹もすいちゃうので11時までは食べないと決めている。食べたいのをひたすら我慢している。

ふむふむ、なるほど。さっそく鋼の意志を持つ調査員に出会えました。確かに〇時までは食べないと決めてしまえば迷うことはなさそうですね。それでも食べたくなるのが悲しいかなヒトの性ですが。ちなみにとある日は、本を読んでから12時半ごろに食べたのだとか。他の調査員の中には、私と同じようにやる事が無くて早めに食べてしまった、というヒトもいました。やはり皆さん、いつもより早く食べたくなるのかもしれないね。いかにそれを我慢できるか、ごはんから気を逸らすことができるか…ということなのかもしれません。来年は時間決めておく方式や読書を取り入れてみたいと思います。果たしてお昼いつ食べるか問題が解消される日は来るのか…？次号もお楽しみに！（※お昼の話続く…ではありません。）

（秋葉れい、2023-2024年参加）



休息日に川遊び。
右が筆者の秋葉さん。

大山より

この通信で原稿を依頼するにあたり、あるいはサイエンスカフェで講演者を依頼するにあたり、わたしが気を付けていることの一つに、「男女両方に依頼する」ということがあります。日本の内閣や国会議員、京都大学の学生や教員とは異なり、ヤクザル調査隊は、幸いなことに、男女の数が、ほぼ同数です。考えてみれば、男子ばかりの理系のクラスから、もっと男子ばかりの京大理学部に進んだ私に、ほんとうの女性の友人ができたのは、ヤクザル調査隊に参加してからです。今年の調査でも、「8年間男子校でした」という男の子がいました。中学・高校の6年間だけでなく、大学に入ってから2年間も、女性の友人はいないとのこと。「世の中の半分は女なんだよ！男とだけ付き合ったら、つままないじゃん！」と、わたしは彼に言いました。彼も、押しの強い女子調査員たちと、過酷な2回目のデン場生活をともにして、8年間の男子校生活に終わりを告げられたんじゃないかなと思います。

ヤクザル調査隊は、性別だけでなく、年齢も関係なく付き合える場でもあると思います。サイエンスカフェなどで新旧の調査員が一緒になると、初対面なのに、すぐに打ち解けて、今と昔のヤクザル調査について語り合うのを見るのは、わたしにとって幸せな瞬間です。妻はよく、「あなたはいつも若者のエキスを吸っているから若いんだ」と言います。49歳の私を、「先生」ではなく、「友人」として扱ってくれる（だよね！？）若者たちに感謝です。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第9号

2024年9月29日発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：安達希、半谷吾郎